



若手研究者育成会を振り返って

東亜同文書院大学記念センター ポストドクター 武井 義和

去る7月28日(火)、本年1月から第三火曜日に、昼休みの時間帯を利用して開催されてきた若手研究者育成会が最終回を迎えた。越知専客員研究員が用意された壺屋の弁当をメンバー一同で頂きつつ、同研究員から本間イズムについての話があり、また小林大学史事務室員より、7月25日(土)に山形から来訪された本間先生のご親戚数名についての説明と、その際に寄贈された本間先生に関する資料の中から、賞状3点の回覧がなされた。

この会は、東亜同文書院大学記念センターのポストドクターやリサーチアシスタントといった若手研究者を育成しようと、越知客員研究員の提案

により始まったものである。同研究員主催の下、事前に決められた報告者1~2名がそれぞれ15分ほどの報告を行うというものであるが、昼食の懇談も兼ねており、メンバー一同が顔を合わせる機会にもなっていた。また特に、今泉潤太郎客員研究員や大島隆雄客員研究員から、学問の先輩としてお話頂いた、発表に対するコメントや研究者に至るご自身の歩まれた道のりなどの内容は、若手の今後の生き方に大変参考になるものであったと思う。

半年ほどの会であったが、若手にとって貴重な話を聞くことができる良い機会であったと思う。



東亜同文書院大学記念センター「若手研究者育成会」に係って

豊橋研究支援課 山本 晃司

オープン・リサーチ・センターに係る若手研究者の育成の観点から、2008年12月から第3火曜日の昼休み時間を有効利用するとして、昼食を共にしながらそれぞれ自由なテーマで研究会等諸行事へ参加した感想・そこから得たもの、それぞれが関心を持っている研究の発表、さらに先輩の研究者から自身の経験を通して研究者へのサゼッション等の時間を持った。

主な内容として、昨年12月に大島隆雄・今泉潤太郎両客員研究員から研究者として「山あり谷あり」の研究活動、自立するまでの体験、敗戦直後の物資不足時代の苦しい学生生活、「中日大辞典」の編纂に係る苦労話等を皮切りに、全国大学史資料協議会出席報告(佃氏)、図書館のデータベース化(豊田氏)、アメリカ・シカゴで開催した講演会報告(藤田センター長他)等7月未まで9回開

催された。

特にポスト・ドクターについては、同文書院大学記念センター事業において一定の分野の研究を担い、またリサーチ・アシスタントについてはプロジェクトの補助的業務の担い手として、文部科学省の補助金の対象になっていることから、それぞれの業務を通して自身の研究の発展に寄与することを期待した。

この研究プロジェクトも5年間の期間限定であり、限られた時間に少しでも研究者として大成への足がかりとなればとの強い思いから、越知客員研究員の企画で進められた。私が記することはおこがましいと思うが、企画した越知客員研究員の熱意等を踏まえ、今後、若手を中心に書院関係の新たな探求と併せて記念センターの充実に期待したい。